

「出してやるよ、もう来るなよ。ばか猫君。」セロひきは扉をあけて、猫が風のようにかやの中を走って行くのを見て、ちょっと笑いました。それから、やっとせいせいしたというように、ぐっすり眠りました。次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくっと飲むとそっくり昨夜のとおりぐんぐんセロをひきはじめました。十二時は間もなく過ぎ、一時を過ぎ、二時を過ぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず、何をひいているかもわからず、ごうごうやっていると、誰か屋根裏をコッコッとたたくものがあります。「なんだい猫、まだこりていないのか」ゴーシュが叫ぶと、いきなり天井の穴からポロンと音がして、1匹の灰色の鳥が降りて来ました。床へとまったのを見ると、それはカッコウでした。「鳥まで来るなんて。オレに何の用だ。」ゴーシュが言いました「ゴーシュさん、あなたに音楽を教わりたいのです」カッコウ鳥はすまして言いました。ゴーシュは笑って「音楽だと。お前の歌は、かっこうかっこうというだけじゃないか」するとカッコウが大まじめに「ええ、

それなんですけど、難しいですよ。」と言いました
「難しいもんか、お前たちのはたくさん鳴くだけで、
鳴き方なんてどうだっていいじゃないか。かっこう。
かっこう。」ゴーシュはふざけてカッコウの鳴くまね
をしました。「ところがそれがそうではないのです。
たとえばかっこうと鳴くのと、カッコーとこう鳴くの
とでは、全然違うのです。」とカッコウ鳥はすまして